



道敷◎
博物館と文脈の幸福なる出会い

江戸の花鳥画はむなしいか

三原大平・フランシスカ

稲賀繁美
Rikaga Shigemasa

「絵画とは何とむなしなものだろう」。静物画を当てこすったこのパスカルの警句を真っ向から打ち砕く画期的な研究書が出た。「江戸の花鳥画——博物館をめぐる文化とその表象」である。「高度な刺製技術をいまだもたなかった18世紀にあっては」だからこそ「絵画という形で鳥のはかない命を永遠に保存しよう」という情熱が異様なまでに高まったというのだ。

珍鳥の姿を羽毛の一本一本に至るまで神経を集中して「生命体の驚異」を描きとった江戸の博物図譜の枚数。そこには対象の生気を、文字通り「写生」しようとする江戸博物学者たちの情熱がこもっている。花を「生ける」秘法（近衛家燕）にも通ずるその技能は、さらに写生のそのまた「模写」という作業を通じて伝達され「継承」されていった。平賀源内を重用した高松藩主松平頼恭から細川重賢や秋田藩主佐竹晴山、その家臣小田野直武やさらには薩摩藩主島津重豪へ、個々の作品の模写関係の精査を通じて、「写生」の系譜の実在が半世紀を超える時間の流れのなかで、鮮やかに明るみに出されてゆく。そのお手並み、ただ者ではないが、著者の今橋理子氏は、まだ30になったばかりの若い研究者だ。筆の運びは明快にして端正、論証は著実に新鮮。自分でひとつひとつ

つ発掘した新発見の作品を次々と積み重ね、それを論拠として歴史のヴェールが毎ページのように剥がされてゆく。

そこにくっきりと浮かび上がるのは、徳川情報交換ネットワーク・システムと語学との、予想を越える連続ぶりだ。例えば匿名高い狩野派の「紛本主巻」は、実は鳥類図譜の継承を助ける補助機構だった。また「鷹狩」制度が珍鳥収集の博物館を支える源泉であったばかりか、江戸の都市空間には、そうした「囃場」が野鳥観察の「バード・サンクチュアリー」として組み込まれ、飼鳥趣味の母体をもなしていた。それら興絵師の活動と政治機構と博物学趣味の合体が、浮世絵における花鳥画の背景にある。その文脈に改めて伊藤若冲から春信、湖龍齋、重政、歌麿から広重という系譜を想定すれば、そこには詩歌の伝統的言語から独立した「物語」なき花鳥への脱皮が見えてくる。俳諧と博物学を兼備した視線の形成には、美意識の、そして認識論上の革新が認められる。それがやがて西欧に逆輸入される振幅まで、論証の展開が同時に通史と化す核は圧巻だ。「彩色江戸博物学集成」(平凡社)とともに、このThe Art of Describing in Tokugawa Japanが海外にも広く認知されることを。(スカイドア 1995刊)